

県立大生の英語スピーキング力の伸長に関する研究（初級編）

システム科学技術学部 知能メカトロニクス学科
2年 栢木 優希 2年 小川 竜輝
システム科学技術学部 機械工学科
2年 鯉沼 伶奈
システム科学技術学部 情報工学科
2年 外松 誠紀 2年 和田健太郎
システム科学技術学部 建築環境システム学科
1年 佐々木彩乃 1年 高橋 俊弘
システム科学技術学部 経営システム工学科
2年 佐藤 璃空 1年 笠原 拓真 1年 渡邊 恵大

指導教員 総合科学教育研究センター
准教授 山崎 健一

研究の背景

国際化が進む現代社会において、英語コミュニケーション能力を備えた人材を育成すべく、イングリッシュクラブは設立された。約半年間活動をした頃に、練習の成果と今後の成長を可視化したいという意見がみられるようになり、今回の研究を行うこととなった。英語に興味のある学生をさらに募集し、研究として成り立つ人数を確保した。

イングリッシュクラブ概要

イングリッシュクラブは、2020年5月に秋田県立大学本荘キャンパスに設立された英会話練習会である。長期休暇中や定期試験直前を除き、毎週開催されている。クラブは基本的に毎週2回開催され、ほとんどの学生が毎回出席した。一回の活動時間は約90分である。学生に加えて本学英語教員も毎回参加し、学生が練習に用いる英会話用のトピックを用意した。練習は基本的にペアワークで行われ、練習法はペアワークに基づくモノログの形態である。時にインタラクティブな会話練習も採用された。本研究参加者のうち、7名は2020年5月にイングリッシュクラブに加入し、前期に3か月、後期に4か月の練習を積んだ。一方、学生自主研究の募集があった時期に加入した3名は、10月から練習を開始した。結果として、本研究では5月に練習を開始したグループと10月に開始した二つのグループが存在する。

研究方法及び研究参加者

5月からイングリッシュクラブに加入した7名（2年生6名、1年生1名）と、10月から加入した3名（すべて1年生）が、約4か月間英会話の練習をする。練習前の9月と練習後の1月にスピーキングのテストを受け、二つの結果を比較する。2回のスピーキングテストをある一定期間の前後に受験して結果を考察する場合、第二言語習得の分野においては二種類の方法がある。一つはまったく異なるテストを用いる方法、そしてもう一つは同じテストを用いる方法である。テストそのものに慣れてしまうという問題や、テストのほんの些細な相違点がもたらすスコアの微妙な差異など、それぞれの方法に問題はある。今回は、日本人学生の初級者対象

ということもあり、2回ともに同じテストを受験した。

10名の学生が2回受験したテストは、いわゆるモノログの形式のものである。学生は事前の準備なく、指導教員の教員室において3つのテストを受けた。すべてのテストは2分間与えられたテーマについて英語で発話するというもので、テーマは「自己紹介」、「高校時代について」、そして「英語」の3種類である。事前の準備時間は全くなく、教員室に来るまで学生は何も知らされていなかった。計6分間の発話は指導教員によって録音され、様々に分析された。

3つのテストのうち、最後の「英語」というテーマの試験は、「English」という単語について各自が思うことを内容を問わず2分間発話するというもので、あるが、イングリッシュクラブにおいては、このような一つの単語について2分間発話するという活動も多くなされた。イングリッシュクラブにおいては、ほぼ毎回一人の学生が与えられたトピックについて2分間発話するという活動が行われた。4か月の練習内容と2回のテストは強い関連性があり、本研究では、実際の練習がどの程度学生の英語スピーキング力に影響したのか、できるだけ正確に測定できるように配慮されている。

研究参加者実際の練習時間であるが、休みなく毎週2回出席した場合、14週×2回×90分＝42時間であった。参加前の英会話練習であるが、10名全員事前に英会話教室棟でスピーキングの指導を受けたことはなかった。また、海外渡航経験は、2名が1週間程度の短期留学をしたのみであった。

研究倫理について

本研究の指導教員は、学生の英語力に関する研究を行うため、「人を対象とした研究実施計画審査」に関して秋田県立大学研究倫理委員会の承認を得ている（令和2年度）。

結果

	9月総語彙数平均	1月総語彙数平均		9月標準偏差平均	1月標準偏差平均
全体(n=10)	109.07	127.82	全体(n=10)	14.10	11.47
5月開始グループ (n=7)	117.90	130.76	5月開始グループ (n=7)	11.47	20.22
10月開始グループ (n=3)	88.44	126.44	10月開始グループ (n=3)	20.22	

2. トピックごと語数標準偏差

表1にあるように、発話された語数平均の3つのトピック間の標準偏差を算出し、比較した。5月開始グループでは増加したものの、10月開始グループでは大幅に減少した。標準偏差が3つのトピック間において小さいということは、それぞれのトピックについてほぼ同じような

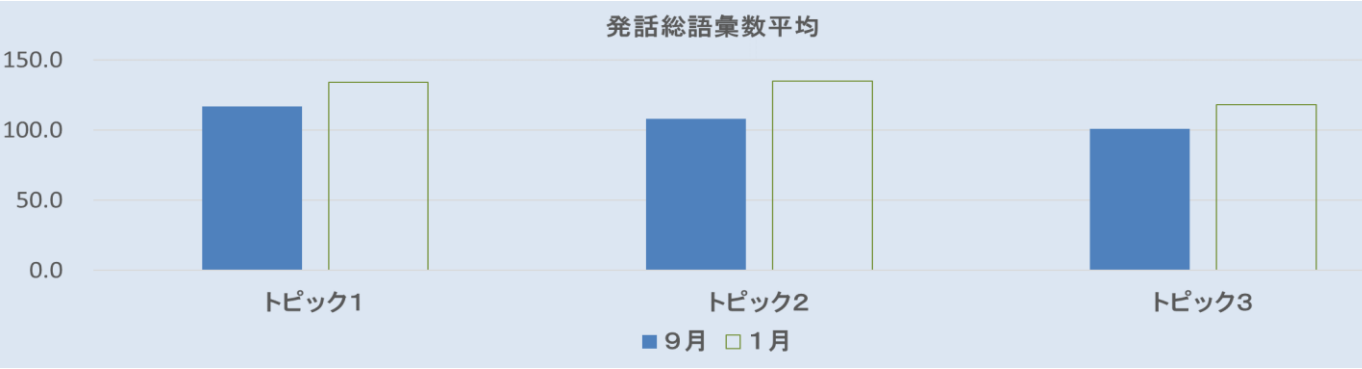
語数で発話していることを示している。たとえば、ある学生の発話語彙数の平均は、9月に104語（トピック1）、108語（トピック2）、そして74語（トピック3）であったのに対して、1月では127語、127語、そして126語であった。

3. 発話項目相関係数

第1回テスト相関							第2回テスト相関						
	密度	文数	エラー	動詞	形容副詞	be動詞		密度	文数	エラー	動詞	形容副詞	be動詞
語数	-0.668**	0.890**	0.471*	0.714**	0.848**	0.735**	語数	-0.775**	0.703**	0.346*	0.743**	0.609**	0.512**
密度		-0.495*	-0.205	0.492*	-0.734**	-0.634**	密度		-0.418*	-0.118	-0.473*	-0.347*	-0.205**
文数			0.385*	0.742**	0.639**	0.724**	文数			0.437*	0.449*	0.448*	0.812**
エラー				0.129	0.383	-0.009	エラー				-0.044	0.242	0.145**
動詞					0.621**	0.761**	動詞					0.707**	0.512**
形容副詞						0.654**	形容副詞						0.492**
**p<.01 *p<.05							**p<.01 *p<.05						

4. トピックごと発話総語彙数平均

表3は、研究参加者全体のトピックごとの発話語数平均値である。9月の第1回目と1月の第2回目において共通している点はいくつかある。たとえば、3回とも1月の方が多く発話されている。また、1月における3回の結果では、差がそれほど見られないということもある。ここで注目すべきは、2回の調査両方においてトピック3が3つのトピックの中で最も語数が少ないということである。



議論及び結論

1. 2020年9月の調査と2021年1月の調査では、発話総語彙数について有意差がみられ、約18.7%増加している。5月から練習をしている学生でも後期にさらなる成長がみられたことは、イングリッシュクラブにおけるスピーキング練習の効果を表している。同時に、10月開始グループの学生も練習後には2分間で平均126語発話することができており、語数に限ってみれば、短時間の練習でも影響があることを示している。

2. トピックごとの発話数が近い数値になったということは、自分に関する内容でなくても、

様々なテーマについて英語で意思表示ができるような能力が身につけていることを示しているといえる。言い換えれば、研究参加者たちは、事前に発話の練習ができない通常のコミュニケーションの場に適応することができているのではないか。

3. 相関係数を見ると、9月の調査では語数と形容詞副詞そしてbe動詞の相関が強いが、1月の調査では弱くなっている。一方で語数と一般動詞の相関は依然強いままである。動詞などの数を測定したデータそのものを見ても、1月には一般動詞がより多く用いられている。これは、参加者が形容詞や副詞、あるいはbe動詞に頼らず、一般動詞をなるべく使用して発話しようとしていることを示している。ただ、表現が豊かになっているかまで明示することは困難である。

4. トピック3に関しては、語彙数は比較的少なかった。自身の経験などではなく、予期せぬテーマについて即興で話すということが、日本人学生にはいまだ難しいといえる。この点は、今後の課題として残されている。

5. この研究を通して、英会話の大切さや意見を相手に伝えることの大変さ、会話することの楽しさを学ぶことができた。また、各個人の英会話での得意・不得意が分かった。今回の研究で分かったことを生かして、得意をさらに伸ばして不得意を少なくできるように今後も英会話練習を続けていきたい。

6. 総合的に見て、4か月間という短期間の練習ということを考慮に入れると、学生の英語スピーキング力は十分向上したと思われる。これは、10名の学生に限ったことではなく、秋田県立大学学生の持つ英語スピーキング力に関する可能性が高いということを示している。